
黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

佐藤よしあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

【Zコード】

Z6909Z

【作者名】

佐藤よしあき

【あらすじ】

「キセキの世代」を有し、輝かしい成績を残した帝光中学バスケットボール部。その中において「キセキの世代」と同等以上の才能を持ちながら、「キセキの世代」によつて目立つことのなかつた存在がいた。

「黒子、君は自分が影だと言つ。ならば私はこいつ言おう、私は闇だ。」

プロローグ（前書き）

主人公が少し性格悪いです、それでもいいなら読んでください。

プロローグ

帝光中学校バスケットボール部

部員数は100を超えて、全中3連覇を誇る超強豪校。

その輝かしい歴史の中でも特に「最強」と呼ばれ無敗を誇った10年に1人の天才が5人同時にいた世代は「キセキの世代」と言われている。

ーが「キセキの世代」には妙な噂が2つあった。

”誰も知らない 試合記録もない
にも関わらず天才5人が
一目を置いていた選手がもう一人
幻の6人目がいた ”

そしてもう一つ、

”公式の試合においては目立たず
華やかな記録があるわけでもない
にも関わらずほぼ全ての選手
「キセキの世代」さえも恐怖した
「神の守護者」がいた”

と

プロローグ（後書き）

思いつきで始めました、変なところがあるかもしれませんから容赦ください。

「いや――！」（前書き）

短いですが1話目投稿です。

「いや――――！」

私立誠凜高等学校では入学式も無事終わり、新入生の部活勧誘の声が飛び交っていた。

「ラグビー興味ない？！」

「日本人なら野球でしょ！」

「将棋とかやつたことある？」

「水泳！チヨー・キモチイイ！」

手当り次第に声をかけてくる先輩達に流石に痺れを切らしたのか、

「進めーん？ラッセル車持つてこい！それがブルドーザーでガーッ
と！！」

「10分で5mも動けねえー…。ってか、キレすぎだろ！」

とうとう新入生2人組がキレ、大声をあげた。
…もつともこの人混みと喧騒では誰にも聞こえておらず、たいした効果はなかつたが。

「勧誘か・・・くだらない。部活動とは自分からやろうという気持
ちがなければ上達などしない。部費確保のためだけにする活動のな
んと無駄なことか。」

聞こえていたら印象の悪くなりそうなセリフを平氣でいう青年。

彼の名前は白崎誠。

彼も新入生なのだが、彼に勧誘をかけるものは皆無。
白髪に鋭く細めた赤い目、ぶっちゃけ怖すぎて誰も近づくものはない
なかつた。

「バスケ部はどこだ・・・」

「バスケ部ブース」

「じゃ、ここに名前と出席番号ね。」

「はい。あとは…出身中学と動機?」

「あ、そちら辺は任意だからどっちでもいいよ。」

（なかなかの逸材ね）

軽いやりとりを済ませた受付の女生徒は先程までいた男子生徒を見て顔を綻ばせ、集まつた入部届を数えていた。

「つと…今10人目か。もーちょい欲しいかなー。（勧誘の方はどうかなー？頑張って有望そうなの連れてきてよねー）」「

「連れて…きました。」

と、思った直後男子部員が一人泣きながら帰ってきた。

「（連れて…こられるとんやんけー？！しかも目の前に野生の虎でもいるみたいな迫力…！こいつ何者！？）つで、知つてると思うけど…」

様々な事を思いつつも説明を始めるがすぐに目の前の青年によつて遮られる。

「そーゆーのいいよ。紙くれ。名前書いたら帰る。」

そのセリフに動搖しつつも彼の書いた入部届に目を通す。

「（中学はアメリカ…！？本場仕込みつてワケ。火神大我君か、タダ者じやなさそーね）」

思いがけない逸材に口角があがるのを抑えられない。

と、そこである事に気付き思わず声をもらす。

「あれ…？志望動機はなし…？」

その呴きに対し青年、火神は無造作に言葉を返す。

「…別にねーよ。どーせ日本のバスケなんてどーも一緒にだろ。」

そう言い捨て火神は去つていった。

「すみません、バスケットボール部のブースはここでいいのでしょうか？」

そうよ、と続けようとしたが相手の顔を見たとたん声がとぎれる。

「（わざ――――――）」

隣にいた男子生徒も似たような思いなのだろう、若干ふるえている。

「記入しておきました。これからよろしくお願ひします。」
「あ、うん。よろしく・・・」

生返事で返し、入部届を受け取る。そして、誠が帰ったとたんに

「（虎の次はオオカミか。猛獸使いはこないかね。）」

若干現実逃避をしていたが、隣に座る部員の声に我に返る。

「一枚入部届集め忘れてるつスよ。」

「え？ あ、ごめん、ありがとう」

”の文字。

「（あれー？ずっと帳番してたのに…全く覚えてない）」
と、不思議に思いつつ紙に田を通していくある1点で止まつた。

「つて帝光バスケ部出身ー？つて、セツキの白髪もー？今年1年つてことはキセキの世代ー？」

「セツキのヤツはアメリカ帰りだし…今年1年ヤバイー？」

先輩に騒がれているとは露知らず渋中の一人である黒子テツヤはある場所へ向かっていく。

「きたか、黒子。あいかわらず読みにくい表情だ。」

「すみません。」

お互に口数が多いとはいえない2人。じつらじつと詫び合って、最初に口を開いたのは白崎だった

「黒子、おまえは高校でもバスケを続けるのか？」

「はい、そのつもりですが。」

「なんとも無謀な賭けでたものだ。この新設校でおまえの新しい光を見つけられるとでも？」

「・・・」

「だんまりか、まあいい。私はおまえを敵にせずに対抗してくる。これからともに頑張りうるじやないか。」

「はい、よろしくお願ひします。」

「ではまた明日。」

「さよなら。」

（黒子サイド）

誠君が帰った後もじつとその場を動かないで、頭の中ではいろいろと考えていた。

なぜ誠君はこの高校へ入学してきたのだらう

彼を敵に回すことがないのは喜ぶべきことだらう
だけどなぜ強豪でもないこの高校へ？ほかの5人と同じくらい勧誘
はきていたはずだ

僕と同じ考え方？

「いや、それはありえないでしょう・・・」

ある意味キセキの世代で誰よりも「アレ」に執着していた。徹底的
といつていいくらいに

「まあ、いくら考えても推測にすぎませんね・・・」

直接聞かないとずっと謎のままだらう。そう結論付けて帰路につい
た。

「バスケ部ブース」

「ねえ、これどう思う？」

女生徒は先ほど集めた入部届の一枚、その中の「動機」の項目を男
子生徒に見せた。

「ん？なんか変？スポーツやってるやつならだれもが思ってるこ
とじやん。」

「なんだけど・・・」

「あれ？こういう考え方持ってる奴って好きじゃなかつたっけ？
なんか変な感じなのよね・・・」

入部届をみながらうなる女生徒。動機欄には「」と書いてあった。

「完全な勝利を手にするためこ

→NGシーン→

「ええっ！？」

「うおっ！？なになに！？」

「ねえ、これどう思ひ？？」

「なになに・・・「誠凜の誠の文字が私の名前と同じ、運命を感じました。」あれっ！？意外とロマンチスト！？」

「じょもない運命だわね・・・」

「わ――――！」（後書き）

いかがでしたか？感想もらえるとうれしいです。

「黒子はボクです」

「白崎は私です……」（前書き）

少し長くなりました。

「黒子はボクです」 「白崎は私です……」

翌日

体育館にて・・・

「よーし全員揃つたなー、1年はそつちな

2年生の声で順に並んでいく。

「なあ、あのマネージャー可愛くねー？」

「2年だろ？」

1年生の視線の先には昨日のショートカットの女生徒。

「けど確かに…もつちょい色氣があれば・・・」

「だアホー違うよー！」

「あいて！」

バキキッと後ろから突っ込んだのは眼鏡をかけた先輩。

・・・

「男子バスケ部カントク、相田リーヴです。よろしくー。

そう言つたのはマネージャーだと思われていた彼女。

「ええ～～！～～？（カントク！～）」

1年生の叫びがあがる。

「うるさい……。」

誠は不機嫌だった。

(あしきじやねーの!?)

1年生の視線は体育館の端に立つ杖をついたヨボヨボのじこせんのもとへ集まる。

「あいや顧問の武田センセだ。見てるダケ」

1年生の心情を察してか相田が言つ。

動搖する1年生に相田は更なる爆弾を投下した。

「…………じゃあまずは、シャツを脱げ!—!—!

「え、え、え、——!—? (なんで!?)」

「監督権限使つた変態行為、なんとも嘆かわしいことだ・・・」「そこおつ!—!誤解を招くこと言わない!—!—!

しつかり聞こえていたようだった。

そして、言葉通り、上半身裸にされた1年生男子諸君。

はたから見れば異様な光景だ。

「・・・・・なんだコレ・・・・

その言葉は至極当然な意見だらう。相田は一年生の前を歩く。

「キミちよつと瞬発力弱いね。反復横飛び20sec／50回位でしょ？バスケやるならもうチョイほしいな。キミは体力タイ、フロ上がりに柔軟して！」

次々と指示を出して行く。

「マジ・・・・・？合ひてる・・・・」

「どういとー？」

「てか体見ただけで・・・？」

1年生の疑問に先ほどの眼鏡の先輩が答える。

「彼女の父親はスポーツトレーナーなんだよ」

データをとつとトレーニングメニューを作る。毎日その仕事場で肉体とデータを見続けてるうちに身に付いた特技。

【体格を見れば彼女の眼には身体能力が全て数値に見える】

「（なるほど）・・・学生で監督を任される力は持つているところですか。」

少し感心した。しかし上半身裸の男をジロジロみていくその姿は、知らない人が見れば十分怪しい。

「一」

次にカントクの眼に止まつたのは・・・

「・・・なんだよ？つか寒みーんだけど」

ほかの1年生に比べて頭一つ高い身長を持つた男だった。

「（な、なにコレ！？すべての数値がズバ抜けてる・・・。こんな高一男子の数値じゃない！！しかものびしろが見えないなんて・・・。）これは・・・天賦の才能！（うつわ生で初めて見る）」

目を光らせて涎まででていた。

「今の姿をみて変態だと思わない方が難しいと私は思つ。
「キミさつきから失礼ねつ！つて、おお・・・」

「（さつきのやつと比べると若干劣るけど）ちの数値もズバ抜けてる！-のびしろも見えない・・・こんな才能が2人も入ってくれるなんてラッキー」

「カントク！いつまでボーッとしてんだよ！」

はっと気づいて、慌て口の端の涎を拭う。赤い目であきれたような視線を向けられ少し心が痛い。

「『めんつつでえつと・・・』

「全員視たつしょ。そいつでラスト」

「あつそう？・・・れ？」

相田はどこか不思議そうにしている。

「…………黒子君と白崎君の仲にいる？」

この一言に2年生は沸きだつた。

「あー、そうだ帝光中の……」

「えー!? 帝光ってあの帝光! ?」

「黒子……白崎……」

「黒子、白崎いるーー! ?」

「（あれー？ あんな強豪にいたんなら視りやすぐわかると思つたん
だけど……）今日は休みみたいね。いーよじや あ練習始めよう! 」

「あの……すみません」

そういう相田の前には人影が……

「黒子はボクです」

「白崎は私です……」

・・・・・・・。

「きやああー!？」

その悲鳴に他の人達もそつちを見る。

「うわあー何?・・・・・・・・うおひつー?ダレ?」

「こつからいたのー?」

「最初からいました」

「ウソオ!ー?」

「私に至ってはさつきガン見されていたのだが・・・。」

「(田の前にいて気づかなかつた・・・!?)え?今黒子つて
言つた!ええ!てゆーか・・・カゲ薄つすつつー!そしてそー
いえばこの白髪赤田!ー!なんで忘れてた私!?)」

「・・・え?じゃあつまつコイツらがー?『キセキの世代』のー?」

「まさかレギュラーじゃ・・・」

3人のやりとりを見ていた部員は黒子と白崎に田をやつた。

そしてぞわぞわと騒ぎだす。

「それはねーだろ。ねえ黒子君、白崎君。」

眼鏡の先輩が2人に同意を求めた。帝光のレギュラーがここにくる

わけがないといつ思いが、黒子の見た目からありえないと思つたか。
だが、2人の返答は・・・

「・・・?試合には出てましたけど・・・」

「控えとしてですが出ていました。」

といつた。

「だよなー・・・うん?」

「え?・・・え!?」

「え、え、え、え、～～～～～!?」

先ほどよりも更に大きな叫びがあがる。

「　　（信じらんねえ～～～!）」「

「そこまで驚くことないでしょ?。レギュラーでなくとも試合には
出られるのですから。」

「あ、ああ・・・すまん」

謝りはするがどこか納得してないようだ。

「ちよつ・・・シャツ脱いで!-!-

「え?着ちゃった・・・」

監督に言われてシャツを脱ぐ黒子。

「（身体能力をみたと）るので意味はないだろ？、黒子の能力には関係がない。）」

そんな事を考えつつ、こちらに集まる視線を受け流す。

しばらくみていたがやっと黒子の身体検査は終わつたようだ。

「（・・・・・！？）オイちょっと聞きたいんだけど・・・帝光中とかキセキのなんたらとか」

デカイ赤髪が男子生徒に何か聞いていたが興味がないので無視していた。先輩たちの話を聞いてその日は解散となつた。

（M A J E B A R G A R E）

そこには火神がいた。・・・トレーに山積みになつたハンバーガーを持つて。

「（『キセキの世代』ね・・・・・・、そいつらならもしかして・・・」

そんな事を考へながら席につくと田の前にさ・・・

「ぐおつづー？」

「どうも・・・育ち盛りですね」

本を片手にシェイクを飲む黒子の姿があった。

「どうから・・・つか何やつてんだよ?」

「ボクが先に座つてたんですけど。人間観察してました」

「（こんなのが日本一の・・・！？・・・つーか、は？・・・人間
観察！？）」

火神は怪訝な顔をした。

・・・・・・・

「それより、ちょっとシラ貸せよ。これ食つてから

火神はそう言った。

（相田 said）

・・・あればどーゆーこと?

彼は何者なの?

能力値が低すぎる・・・！

全ての能力が平均以下・・・

しかもすでにほぼ限界値なんて・・・

白崎君ならわかるけど、とても強豪校でレギュラーをとれる資質じゃない・・・・

そのことについて白崎君に聞いてみたら・・・

「黒子のことを言葉にして伝えてもよく理解することは不可能でしょ。実際に試合をすればすぐわかります。」

としか返つてこなかつた。

一体
!?

→ストリートバスケ場へ

「オマエ・・・一体何を隠してる?」

「・・・・?」

「・・・・・・オレは中学2年までアメリカにいた。日本戻つてきてガクゼンとしたよ、レベル低すぎて」

黒子は不思議そうにしている。火神は黒子に構わず続ける。

「オレが求めてんのはお遊びのバスケじゃねー。もっと全力で血が沸騰するような勝負がしてーんだ」

・・・火神の曰はあるで黙のよつに鋭くとがつている。

「……けどやつさいいい事聞いたぜ。同学年に『キセキの世代』って強え奴らがいるらしーな。オマエはそのチームにいたんだろ?」

火神はそう言つと、バスケットボールを黒子に渡した。

「オレもある程度は相手の強さはわかる。ヤル奴つてのは独特的の匂いがすんだよ……白崎つていつたか?あいつはスゲエ、強いやつの中がブンブンしゃがる。が、オマエはオカシイ。弱けりや弱いなりに匂いはするはずなのに……オマエは何も匂わねー、強さが無臭なんだ。確かめさせてくれよ。オマエが……『キセキの世代』つてのがどんだけのもんか」

火神の口はますます獣じみたものになる。

「…………奇遇ですね」

「…………」来て初めて黒子が声を出した。

「ぼくもキミとやりたいと思つてたんですね。1対1」

黒子が学ランを脱いだ。

そして、勝負が始まつた。

が、

「はあ!?(…………死ぬほど弱えええ!!--)」

黒子はショートしても入らなかつたりドリブルミスしたりあつさりボールを奪われたり、早い話が弱かつた。

現在、火神16対黒子0

「（体格に恵まれてなくとも得意技極めて一流になつた選手は何人もいる。けどコイツはドリブルもシューートも素人に毛が生えたようなもん・・・取り柄もへつたくれもねえ・・・話になんねー！？！）」

「ふざけんなよテメエ！…話聞いてたか！？どう自分を過大評価したらオレに勝てると思ったんだオイ！」

ついに火神がぶちギレた。

「まさか」

それに黒子は飄々と返す。

「火神君の方が強いに決まってるじゃないですか。やる前からわかつてます」

なに言つてんだコイツ、とでも言いたげな顔であつさりと

「ケンカ売つてんのかオイ・・・…どうこうつもりだ！」

火神が怒りに震えて怒鳴る。

「火神君の強さを直に見たかったからです、あとダンクも」

「…はあ！？」

そんな火神にもひるむことなく黒子は続ける。

「（つたく・・・びーかしてたぜオレも・・・。ただ匂いもしね
ほど弱いだけかよ・・・。アホらし・・・）」

「あの・・・」

「あーもういいよ。弱え奴に興味はねーよ。・・・最後に一つ忠告
してやる」

火神は黒子を軽くあしらい荷物をかついだ。

「オマエバスケやめた方がいいよ。努力だの何だのどんな綺麗事言
つても世の中に才能つてのは厳然として“ある”。オマエにバスケ
の才能はねえ」

「・・・・・・・・それはいやです」

「・・・・・!？」

火神の遠慮のない言葉に黒子は黙ることなく返す。

「まずボクバスケ好きなんで。それから、見解の相違です。ボクは
誰が強いとかどうでもいいです」

「なんだと・・・」

この言葉に火神は怒ったように返す。

「ボクはキミとは違う。ボクは影だ」

「…………？」

火神は言葉の意味を理解していない。

黒子はそれ以上はなにも言わずに夜道を歩いて行った

翌日、外は雨が降っていた。

「ロード削った分練習時間余るな…………ビーアントク」

「（一年生の実力も見たかったし……）ちょっといいかもね。5
対5のミニゲームやろ？一年対一年で」

「センパイと試合つて…………！」

「覚えてるか、入部説明の時言つてた去年の成績……去年、一年
だけで決勝リーグまで行つてるつて…………！」

「マジで…………！」

「フツーじゃねえぞソレ…………！」

先輩達の実力を聞いて、一年はビビっていた。

「（…………たへへ、ルーキー達はどうまでもやれるかな？）

「ぐるといじやねー。相手は弱いより強い方がいいに決まつてん

だろ！ 行くぞ！！

「向ひもイーリシシヒー細考で・・・」

「なんか言つたか『ラア！』

そして始まつた一年対一年の試合・・・・・

ପ୍ରକାଶନ କୂଳ

ガッシュ！

સુધીની પત્રો

「カナダの今」から見るカナダ

ノルマニ

一発目から少神はタングで先制した

りなセンスまかせのプレイでこの破壊力・・・!!」

「どんでもねーなオイ……（即戦力ど「るかマジで化物だ！」）」

試合は進み現在11-8、一年がリードしていた。

「一年がおしてる！？」

「つーか火神だけでやつてるよー。」

「（んなことよつ・・・・・・・クソツツ、神経逆なでされてしま
がねー・・・・・・・）」

火神の機嫌が悪い理由・・・・・・それは。

バチッ

黒子は持っていたボールを弾かれあつさりと奪われてしまった。

このやり取りは試合が始まつてからずつと続いている。

「ステイール！？またアイツだ！」

「しつかりしるーーー！」

「（意味深な事喋つてた割にクソの役にも立ちやしねえ・・・・・・
ザコのくせに口だけ達者つーのが・・・・・）一番イラつくん
だよーーー！」

イライラしながら火神はジャンプしてボールを弾いた。

「（そして何だアイツはつー試合始まつてからくじに動いてねーーー
・・）この程度かつまらねえ」

火神は試合開始からほとんど動かない白崎に対し失望したようだ。

「・・・・・・・・・・・・」

「高」・・・・・

「もう火神止まんねーーー！」

「…………わけにはいかねーなー（怒）そろそろ大人しくして
もらおうか！」

キュツツ
!!

三人！？

怖い。
これ以上はやらせないと火神に三人のマークがついた。なぜか顔が

「・・・（怒）」

「ええっ！？違つ！（汗）」

さつきのこの程度発言で怒らせたようだ

「そこまでして火神を・・・・・」

「しかも・・・・・ボールを持つてなくとも2人・・・・・ボ

ルに触れさせもしない気だ！」

火神が押さえられた結果、試合の流れはあつという間に逆転し15-40と一気に点差をつけられた。

「流石先輩達…………強いね」

「てゆーか勝てるわけなかつたし…………」

「もういいよ…………」

諦めの言葉を呴いた相手に火神は突つかつた。

「…………もういいって…………なんだそれオイ…………」

「落ち着いてください」

黒子は火神を宥めるため膝カツクンを実行した。

「…………！」

「手ぬるい、後頭部にハイキックを放て」

「テメ…………そして殺す気かっ！？」

宥めるどころか更に揉め事がヒートアップした。

「なんかモメてんぞ」

「黒子か…………そーいやいたな～」

「（審判の私も途中から忘れてた…………んんー？あれ？マジでいつからだつけ！？…………まさか）」

「すいません、適当にバスもらえませんか」

「は？」

「（みづかへか・・・）黒子、一いちも準備はできた。必要か？」

「・・・よひշくお願いします」

「がんばれ、あと3分！」

「（でか、もうつても何ができるんだよ？せめてボール取られんなよ
～～）」

ボールが黒子に手に渡った時、空気が変わり始めた。

「（この違和感はなに？もしかして…何かとんでもない事が起きてる…！？）」

次の瞬間、黒子が持っていたボールはゴール前にいた9番へとバスされていた。

「・・・・・え・・・・・あつ」

ボールに氣づくと9番はすぐにショートを決める。

「・・・・・え」

「・・・・・な」

「入っ・・・・・ええー？今ビーやってバス通った！？」

「わからんねえ見逃した！！」

その後、誰も黒子のパスは止められず流れは再び一転し始めた。

「どーなつてんだ一体！？！」

「気がつくとバス通つて決まつてるー？」

「…………（存在感のなさを利用してバスの中継役に！？しかもボールに触ってる時間が極端に短い！…………じゃ彼はまさか…………元の力ゲの薄さを……もつと薄めたつてこと／＼！？）」

「ミステイレクション」……手品などに使われる人の意識を誘導するテクニック。

ミステイレクションによつて自分ではなく、ボールや他のプレーヤーなどに相手の意識を誘導する。

つまり　彼は試合中『カゲが薄い』と言つよつもつと正確に表現すると、自分以外を見るように仕向けている。

「こちらも動きますか・・・9番、5番が4番ヘループバスをしようとしています。4番は3Pの準備をしています、打たせないで。」

「ええつ！？」
「なつ！？」

全員が驚いた。体制を崩しながらも5番の先輩が4番へパス、4番の位置は3Pライン……驚いて打てなかつたが、ほとんど当たつ

ていた。

「（・・・始まりましたか）」

「12番、後ろへバス。13番へのバスは8番からステイールを狙われています！」

自らバスを受け取り、ゴールにせまる。8番の先輩が驚いているのを見るとまた的中。

「何でわかるんだ！？」

「しかも全部！？」

「1Jのシユートはあります！リバウンドはいりません、戻つて！」

「3Pシユートだぞ！？」

外す確率の高い3Pにも迷わず戻る指示をだす。ボールは見事ネットを通過していた

「（1Jのが黒子と白崎の……！）」

弱いと思っていた二人がこれ程の実力を持つていたという事に火神は驚きを隠せなかつた。

「（元帝光中のレギュラーでバス回しに特化した見えない選手・・・
・・・！）尊は知つてたけど実在するなんて・・・！！『キ
セキの世代』幻の6人目！そして白崎君・・・彼は多分、全ての
プレイを見抜きゲームを完全に掌握する・・・『神の守護者』

「……」

「あッ……」

「（しまつ・・・・・・・・ 黒子のバスと白崎の指示に気をとられすぎた・・・・・・・・!）」

「火神!!」

火神のマークが甘くなつた事により、再び火神が得点を稼ぎ44-45と一気に追い上げた。

「うわあ!! 信じらんねエ!!」

「一 点 差!!?」

「つたく、どっちか片方でもシンディのに・・・・・更に白崎も混ざるとなると（三人組んだ時のこの獵豊さは手がつけらんねーな）

「

「つちゅ!!」

「バツ・・・・・・・・

ボールがパスされた先には黒子が待機しており、ボールの奪取に成功した。

「つおおー!」

「いけえ黒子!!」

「ゴールに近づき、黒子はショートを決めに行く。

「勝つ・・・・・」

「無理です。」

誠以外勝利を確信したが・・・・・

ガボン・・・・・

ボールはゴールに入らなかつた。

「黒子にパス以外のことを任せではいけません

「・・・・・だから弱ええ奴はムカツクんだよ。ちゃんと決める
タコーーー！」

ガンッ！

火神が最後にダンクを決めて、一年の勝利が決まった。

「うわあああーーー！」

「一年チームが勝つたあーーー？」

「ははっ（まあ・・・・・味方なら頼もしい限りってことか・・・
・・・）」

「こうして本日の部活は終了した。」

「M A J E バー ガー」

「・・・・・」

火神が座る席には黒子と白崎の姿があった。

「・・・・・ 何でまたいんだよ・・・・・」

「ボク達が座ってる所にキミが来るんです。好きだからです、このバニラショイク」

「私は黒子に話があるというからつきあつていいだけだ。ちなみにこれは爽健美茶だ。」

飲み物を飲みながら対応する

「どうか違う席行けよ」

「いやです」

「黒子次第だ」

「仲いいと思われんだろうが・・・・・・・・

「だつて先座つてたのボク達ですもん」

「・・・・・ ホラよ」

火神はトレイに積み上げられたハンバーガーを一つ取り、黒子と白崎に投げ渡した。

「？」

「一個やる。バスケ弱い奴に興味はねー。が、オマエのこと、それ一個分位は認めてやる」

「…………どうも」

「悪いが私はいらない、栄養摂取にも気を使っているのでね。ジャンクフードは食べる気になれん」

「どこのジジイだよ…………」

「ジジイではない一體のことを考えるのはスポーツ選手として当然のことだ！」

「夜9時に寝て、朝5時に起きて乾布摩擦する人ですか？」

「ジジイじゃね——か——！」

「…………」「キセキの世代」つてのはどんぐりこ強えーんだよ
？」「？」

「じゃあオレが今やつたらどうなる?」

「…………瞬殺されます」

「馬鹿は人に勝てん」

黒子と白崎は即答で断言した。

「もつと違う言い方ねーのかよ……おいこら、白崎!…おまえ人外のバカだと言いてえのか!?(怒)」

「ただでさえ天才の5人が今年それぞれ違う強豪校に進学しました。まず間違いなくその中のどこかが頂点に立ちます(うちも可能性がないわけでもありませんが……)」

「…………ハツ、ハハハ」

「壊れたか?」

「いいね、火イつくぜそーゆーの…………決めた!そいつら全員ぶつ倒して日本一になつてやる」

「ムリだと思います」

「冗談は髪だけにしどけ」

「うおいつ!……つて、白髪のおまえに言われたくね——よ——」

それぞれの飲み物を飲みながら、一人は即答で言い切った。

「潜在能力だけならわかりません。でも今の完成度では彼らの足元

にも及ばない」

「今のおまえは少し高い位置にいるだけ。本物の化け物にはほど遠い」

「……ボクも決めました。ボクは脇役（影）だ……でも影は光が強いほど濃くなり光の白を際立たせる。主役（光）の影として、ボクも主役を日本一にする」

「私はバスケで勝つためにここに来た。化け物には及ばないが、少しはマシなおまえが使い物になることを期待する」

「…………ハツ、言ひな。勝手にしちよ」

「頑張ります」

「わかった、勝手にしちよ」

（NGシーン）

「…………もういいって…………なんだそれオイーー！」

「落ち着いてください」（膝カツクン）

「黙れ・・・『メリッ』あつ」（膝力ックンで狙いがそれでキック

לְמַנְחָה אֲשֶׁר-בָּא כִּי-כֵן וְעַל-

「火神イイイ——！——！」

「すまん・・・」

「黒子はボクです」 「白崎は私です……」（後輩たち）

「どうでしたか？感想も聞かねといつれしこです。

「丹羅朝8・40の屋上ねー」（前書き）

丘崎の目的がわかります

「月曜朝8：40の屋上ねー」

（朝の教室）

「おーい白崎。」

「降旗君、でしたか？何か」用ですか？」

「おー、名前覚えてくれたのか。おまえ本入部屋もーつた？」

「いえ、まだですが。」

「じゃあもうつてきた方がいいぞ。俺らまだ仮入部状態だから試合には出られないらしいからな。2・Cの監督のとこ行けばもらえるから。」

「そりなんですか、教えてくれてありがとうござります。」

「どういたしまして。・・・なあ、敬語やめない？」

「すみませんね、初対面の人にはどうしてもしつなつてしまふんです。」

「あれ？火神は？最初から敬語じゃなかつたけど。」

「なに言つてるんです？山猿は人ではないでしょ？。」

「ひどつー。？」

（2-C・昼休み）

「失礼します、相田リコ先輩はありますでしょうか？」

「……普通だ。」

「はい？」

「いや、さつき立て続けにびっくりしたから、つい。」

「はあ……あの二人と一緒にしないでください。大方、火神が大声で「監督！ 本入部届けくれ！」といつて勢いよくドアを開け放つて、黒子は直前まで気配消して「…………本入部届け下さい。」とでも言って、驚いて牛乳吹いたというところでしょうか？」

「そこまでわかるあなたの方が驚きだわ！？」

「一人の性格と少し残った牛乳の臭いから考えればすぐわかります、用件は一人と同じです。」

「はー……じゃあこれ、本入部届ね。あ、受け取るのは月曜朝8：40の屋上ね！」

「……その時間は朝礼が始まる直前ですが？」

「あら、覚えてた？ まあ、そのときのお楽しみひとつで

その場では聞き出せないとあきらめて2-Cを後にした

「ん？あそこにはいるのは・・・」

教室に戻る途中、そこには掲示板に貼られた誠凛学生新聞を見る火神と黒子がいた。

「へー、ここはバスケット部って結構すげー・・・・のかな？」

「すういですよ。」

「・・・・・・・・！」

突然現れた黒子に火神は声も出ないくらいビックリした。

「テメーはーフツーに出るーー！ヒヨーをつくなーー！」

「おまえも静かにしろ、図書室前で大声は関心できない。」

「なつーー？」「イツがビックリするようなことするから・・・・！」

その横でじーー、と口に人差し指を当てて火神を注意する黒子。

それを見て火神はついにキレた。

「おちよくつてんのか？おちよくつてんだよな？オイコラー！」

「・・・・・・違います。」

「やばい音が出ているぞ。」

火神は黒子の頭を驚撃みして握り潰す勢いで握っていた。

「（マジ信じらんねー。普段はカゲ薄いだけのコイツが・・・・・・・・
バスケじゅ幻の6人目なんて呼ばれてるなんて……白崎は「キセキ
の世代」と同じくらい強いつて話だし・・・・・・・・）」

「白崎君は監督のところに行ってきたんですか？」

本人部届けに視線を向けていう黒子

「ああ、おまえは日常ではもっと存在感を出せ。周りが迷惑する。

火神が考え事をしてる間に一人は話ながら教室に帰る。

「（・・・・・・・・そーいやなんでだ？他の「キセキの世代」はみん
なもつと強豪に行つたんだよな？なんでコイツらは行かなかつたん
だ？）おい黒子、白崎・・・・・・・・」

火神が振り返った時には黒子と白崎の姿は当然ない。

「どーでもいいかそんなこと・・・・・・・まずは・・・・・・（次
会つた時ブツ殺そう・・・・・・・・）」

メギギ・・・・・・と音を立てながら火神は手すりを破壊した。

～翌日・月曜8：40～

「フツフツフ、待っていたぞ！」

屋上では腕を組みながらカントクが待機していた。

「…………アホなのか？」

「決闘？」

「これだけの人数に一人で勝てるなどと思ひまい。」

「つーか忘れてたけど…………月曜つてあと5分で朝礼じゃねーか！」

本日月曜は学生の恒例行事、朝礼である。

「とつとと受けとれよ。」

「その前に一つ言つとくことがあるわ。去年、主将にカントクを頼まれた時約束したの。全国目指してガチでバスケをやることーもし覚悟がなれば同好会もあるからそっちへどうぞ！ー」

「…………は？ そんなん…………」

「アンタラが強いのは知ってるわ。けどそれより大切なことを確認したいの。どんだけ練習を真面目にやっても、「いつか」だの「できれば」だのじゃいつまでも弱小だからね。具体的かつ高い目標とそれを必ず達成しようとする意志が欲しいの」

カントクの表情は真剣そのもので、バスケに対する熱意が感じられた。

「んで今！ここから！！学籍番号！名前！今年の目標を宣言しても
らいます！ちなみに私含め今いる2年も去年やつちやつたつ さら
に、できなかつた時はここから今度は全裸で好きな口に告つてもら
います！」

『え、え~~~~~！？』

最後の爆弾発言に一年全員が叫んだ。

「・・・・・
たゞ?」

「（はあ！？聞いてねー）」

「いや勧誘の時言つてた・・・・・(一)」

(さどまさか!)「までも…・・・・・・!?(」

「さりきも言つたけど具体的で相当の高さのハードルでね！」一回戦突破」とか「がんばる」とかはやり直し！」

「…アハハハハハ…」とかマジかよー。」

（しかもコレあとで絶対オフられるぞ）

ほとんどの一年が戸惑う中、火神は平然とした顔をしていた。

「ヨコーじゃねーか。テストにもなんねー」

火神は柵の上に飛び乗り、早速カントクの指令を実行した。

「1・B 8番!火神大我!..「キセキの世代」を倒して日本一になる!」

火神は樂々とカントクの指令を完了。

「次はー?早くしないと先生来ちゃうよ(つづアレ?・黒子君もダメ?白崎君は・・・)」

「仕方ないですね・・・早めに済ませた方がよせやつです。」

あまり乗り気ではなせやつだが、柵の前に移動して声を発する。

「1・A 12番!白崎誠!..「キセキの世代」を完全に沈黙させる!..」

大声で叫びやつをに戻る。

「これでよろしいですか?」

「まつ、OKかな。次はー?」

「すいません、ボク、声張るの苦手なんで拡声器使つてもいいですか?」

監督の真横に拡声器を持った黒子が登場。

「・・・・・いいケド」

そしてこざれ田標を叫びましたその時・・・・

「『ハリーハリ』またかバスケ部！！」

「あ、り今年は早い！？」

屋上に先生が現れ、バスケ部一同はしじまく説教を受ける結果となつた。

（マジエバーガー）

「ちよっと大声出したぐらいであんな怒るかよ？」

「未遂だつたのにボクも怒られました……」

「仕方ないだろ？、あのような勝手なまねをすれば怒られて当然だ。」

「

ずーん、と落ち込む黒子と、白崎の存在に気づき、火神は驚き飲み物を噴き出した。

「（…………店変えよーかなー）」

「…………あと困つたことになりました」

「ホントだよ…………ああー？何ー？」

「いきなり約束を果たせそうにないです」

「は？」

「なんかあれから屋上、厳戒態勢しかれたらしくて。入部できなかつたらどうしましょ？」

「それはない、私と山猿だけなど考えるだけでおぞましい。」

「失礼にもほどがあるぞコノヤロー……それより一つ気になつてたんだけど、そもそもオマエらも幻の6人目やら神の守護者なんて言われるぐらい有名だろ？なんで他の5人みてーに名の知れた強豪校に行かねーんだ？」

一番疑問に思つていた事を火神は一人に向けて質問した。

「オマエらがバスケやるのには……なんか理由あんじゃねーの？」

「…………ボク達がいた中学校はバスケ強かつたんですけど」

「知つてるよ（怒）」

「そこには唯一無二の基本理念がありました。それは……」

「勝つことがすべて」

それが帝光の方針であり、そのために必要だったのはチームワークなどではなく、ただ「キセキの世代」が圧倒的個人技を行使するだけのバスケット。

それが最強…………でもそこには「チーム」というものが一切なかつた。

「6人は肯定してたけどボクには…………何か大切なものが欠落してる気がしたんです」

「…………で、なんだよ？ そうじやない…………オマエのバスケで「キセキの世代」倒しでもすんのか？」

「そう思つてたんですけど…………」

「マジかよー？』

「…………」

「それよりこの学校でボクは…………キミと先輩の言葉にシビれた。今ボクがバスケをやる一番の理由は…………君とこのチームを日本一にしたいからです」

「相変わらずよくそんな恥ずかしいセリフばっか言えんなーってかどつちにしろ「キセキの世代」は全員ぶつ倒すしな。白崎はどうしてだ？」

「私は昨日も言つたが、勝つためにここへきた。「勝つことがすべて」という帝光の方針にはもちろん賛成している。」

「そういうさつきの人つて……じゃあなんで強豪校に行かなかつたんだ？ 誠凜より強いところなんていぐらでもあるだろ？」

全然わからない、という様子の火神。

「簡単なこと、私の求めているのは「勝利」ではなく「完全勝利」。

帝光時代、すべての試合で勝利した・・・だが、私の力が必要だったかと問われると肯定はできない。」

「は？ あんな未来予知じみたチカラを使えれば・・・」

「強すぎた・・・ということですか？」

火神の言葉を黒子が遮り、白崎が頭を縦にゆらした。

「そう、「キセキの世代」5人の力があればそれで十分。私は良く言えば勝利を100%にできる選手、だが実際は余剰戦力でしかなかつたと思う。接戦なんてものは数えるほどしかなかつた。」

「キセキの世代」5人が試合をすればダブル、トリプルスコアは当たり前。途中で相手が戦意消失して試合の結果が終了前に決まるなんていうのが当たり前だった。

「ゆえに、私の力を持つて勝利する。どうせなら無名の学校で強豪を倒す。それを成せば私自身満足する結果が得られるだろう、それが理由だ。」

「なるほどな・・・」

「もちろん、危ない試合を救つたこともある。無敗の栄光を守る守護者なんて意味の二つ名ももらつた。」

1軍だけでなく、2軍以下も負けが許されなかつた帝光。その試合へ同行し、危ない時は窮地も救つた。無敗伝説を守つた誇りもある。しかし、すべて格下・・・十分満足はできなかつた。

「もし、私を倒す価値があると思うのならば、いつでも勝負を受けよう。すべてに勝利することに意味がある。」

おまえには負けない発言に火神は黙のよつた田で

「上等じゃねーか・・・その言葉忘れるなー！」

ガタッと音を立てて火神は席から立ち上がった。

「黒子、一つ言つておく『したい』じゃねーよ。日本一にすんだよ！」

大量のハンバーガーを残して火神は帰つていった。

「黒子、君は自分が影だと言つ。ならば私はこいつ言おう、私は闇だ。この意味をどう取るかはおまえ次第・・・もちろん受け取り方によつては私を許せないとthoughtかもしれない。」

「はい・・・」

「おまえに私の考えは受け入れがたいものかもしれない・・・だが、私は考えを変える気はない。」

「・・・・・・・」

「ではまた明日、ずいぶん長いことしゃべつてしまつたな・・・私もしない。」

そういうて帰らうとする白崎を黒子が捕まる。

「ボクに全部押しつけないでください、どうするんですかこのハンバーガー。」

火神が置いていった大量のハンバーガーを指さして言つた。

「仕方ない・・・」

ハンバーガーをどう処理したのかは二人のみが知る・・・

？？？「ハア！？なんだこのバーガーの山！？」

翌日、教室内はとても騒がしかつた。

「なんだ騒がしいな」

教室にやつてきた火神は窓側にできた集団の元へと近づいた。

「・・・・・ハツ！」

グラウンドを見ると、そこには「日本一になります。」と白線で大きく書かれていた。

「黒子、名前はどうした・・・」

「あつ・・・」

後に「これは謎のミステリー サークルとして誠凛高校七不思議の一つとなるのであった。

放課後、バスケ部は練習に励んでいた。

「おい、カントクどした？練習試合申し込みに行くとか言ってたけど？」

「さつき戻ったスよ。なんかスキップしてたし。オッケーだったみたいスね」

「・・・・・!—スキップして!—?」

一年のその言葉を聞いて主将はギョッとした表情に変わった。

「オイ、全員覚悟しどけ。アイツがスキップしてることとは・・・・・次の試合相手相当ヤベーザ」

そして噂をすれば何とやら・・・・・鼻歌を歌いスキップしながらカントクがやってきた。

「あ、カントク・・・・・おかえりなさい」

「ただいまー!—」「メンすぐ着替えてくるね」

そのまま更衣室に向かうかと思ひきや、カントクはピタリと足を止めた。

「…………あとね、「キセキの世代」このアートと試合…………組んじやつたつ…………」

爆弾を投下した後、カントクはスキップして去つてこつた。

「…………」

「な？」

「…………！」

「マジ…………！」

「わい、誰がくるのやい…………」

みんな驚き（黒子含む）白崎は予想以上に早い再会に少しあきれた。

（NEXTシーン）

「1・A 12番—白崎誠！—生徒会に入つて部費を増額させる—

!

「そういう意味の田舎じやなにわよつー!?」

「月曜朝8：40の屋上ねー」（後書き）

次回キセキの一人登場です！

「「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太」（前書き）

一人目登場

「「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太」

（男子バスケ部・部室）

「あれ？ これって……？」

部室から一冊の雑誌、月刊バスケットボールと書かれたものが出てきた。

「この号、黒子と白崎が帝光いた頃のじやん？」

「おー、一人一人特集組まれてるよ「キセキの世代」」

「黒子は……記事ねーな。」

「6人目なのに……取材来なかつたの？」

「来ただけど忘れられました。」

『（切ね　！－！）』

取材を忘れられたと聞いて、全員の心の声が一つになつた。

「それに、そもそもボクなんかと6人は全然違います。あの6人は本物の天才ですから。」

「あ、これ白崎じゃね？」

「どれどれ……」「キセキの世代」には身体能力で一步劣る

ものの、彼が出場した時点で試合が決する。絶対不可侵の領域を作りあげる「神の守護者」・・・しつかり載つてゐる・・・

一ページまるまる掲載されていた。

「あれ？ そりいや本人いなな・・・どうしたんだ？」

「あつ、今日は担任から手伝い頼まれたから遅れるらしいです。」

同じクラスの降旗が思い出したかのように答えた。

「そりか・・・つひヤベツ！ 時間ないぞ！」

「全員早く着替えろ！ 練習量2倍になんぞ！」

それを聞いてあわてて着替え始めた。

同時刻、誠凛へと足を踏み入れる者がいた。

「おー、ここが誠凛。さすが新設校、キレイっスねー」

「見てあの人カッコイー」

「背も高・・・・・・つてもしかしてあの人モデルの・・・・・・

キセキ同士の再会はもうすぐ田の前に迫っていた。

－キュッ キュッ ダムツ

その頃体育館ではゲームが行われていた。

黒子からのパスを受け取った火神は相手の右側をドリブルで抜いた。

「いやまだだーくらこついて…」

そう誰かが言った瞬間、火神は体を逆へ切り返しダンクを決めた。

これには流石に相手も反応できなかつた

「うおおーーー！」

「ナイッ シューアー」

「すげーな、フルスピードからあの切り返しーーー？ キレが同じ人間とは思えねーーー？」

「もしかしたら「キセキの世代」とかも勝つてる……………？」

「あるかもーつかマジでいけんじゃね？」

「あんな動きそつそつできぬーーって。」

「むしろもう超えてるーー？」

先程のプレイを見て、黒子はふと以前自分が言つた言葉を思い出し

ていた。

『今の完成度では彼らの足元にも及ばない』

「とは言つたけど……」

「あれ？ 黒子二だ？ 集合ひいて言つてんの。」

「あーもー、たまにすげー困るよ。」

「黒子ーーー出でーーー！」

はつと我に返り黒子は集合場所へと移動した。

「海常高校と練習試合！？」

「つそー相手にとつて不足なしー一年生もガンガン使つてくれよー。」

「不足どうかすげえ格上じやねーか・・・・・・」

「そんなに強いんですか？」

「全国クラスの強豪校だよ。エ・エとか毎年フツーに出でる。」

『ええつーつ』

初めての練習試合が全国クラスの強豪校と知り、一年は驚くしかなかつた。

「それよりカントク、帰ってきた時言つてたアレ、マジ？』

「 もううんー。」

「 アレ?」

「あれ火神聞いてなかつた?」

「 海常は今年「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太を獲得したトコよ。」

「

「 (・・・・・) 「キセキの世代」 ! !) 「

「ええつー?」

「あのー!?」

「 (まさかこんなに早くやれるなんてな・・・・・・ありがてーー!
!テンション上がるぜー) 」

「 しかも黄瀬つてモデルもやってるんじやなかつた?」

「マジー!?.」

「すげー!!」

「カツ」よくバスケ上手いとかヒドくねー?」

「もうアレだな・・・・・・妬みしかねえ・・・・・・」

「ヒクツだなー。」

ザワザワ・・・・・

・・・・・！？ちよ・・・・・え？

気づけば体育館には女子の集団の列がズラリと並んでいた。

「何!? なんでこんなギャラリーできてるの!?

「あーやー・・・・・」こんなつやつじやなかつたんだけど・・・・

「なんでもいいんだから、おまかせ！」（うん）

「…………お久しぶりです」

体育館の舞台上、そこにいたのは・・・・・

「黃瀨涼太！！」

「ひときわしぶり。スイマセン、マジであるの……えへへと……てゆーか5分待つてもらっていいスか?」

「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太だつた。

「……………」（二つが……………）

「…………なつ、なんでここにー?」

「いやー次の相手誠凛つて聞いて黒子たちが入ったの思い出したんで挨拶に来たんスよ。中学の時、一番仲良かつたしね!」

「フツーでしたけど

「ヒドシ……!」

黒子はあつやりと仲良し説を否定した。

「すげー、ガツツリ特集されてる…………」

「どうから持つてきた。」

「部室っス。」

いつの間に持つてきたのか、一年の一人が雑誌を読んでいた。

中学2年からバスケを始めるも、恵まれた体格とセンスで瞬く間に強豪・帝光でレギュラー入り。

他の五人と比べると経験値の浅さはあるが急成長を続けるオールラウンダー、と黄瀬の事が紹介されていた。

「中2からー?」

「いやあの…………大ゲサンんスよその記事、ホント。「キセキの世代」なんて呼ばれるのは嬉しいけど、つまりその中でオレは一番下つぱつてだけスわー。だから黒子たちとオレはよくイビら

れたよ

そつゝスよねつ、と黄瀬は黒子に賛同を求めるが・・・

「ボクは別になかったです。てゆーかチヨイチヨイテキトーンなコト言わないで下さい」

「あれ！？オレだけ！？」

再びあつさつとそれは否定された。そのとき・・・

「遅れすみません、今から参加します。」

遅れていた白崎が到着した。

「その声・・・・まあか白崎つちー？」

「ん？・・・おまえだつたか・・・・・・」

黄瀬は驚きの表情で白崎を凝視し、白崎は黄瀬を見るなりため息をはいた。すると黄瀬は感極まつた顔をして

「白崎つちーーー！」

すゞい勢いで突進する黄瀬。それを見た白崎は黄瀬に向かつて走り出す。

『えつ！？白崎つてそんなキャラだつけ！？』

みんなが感動の包容を予想した・・・が

「フンシッソー！……」

「ぐはああああ——！……！」

『ええええええ——！？』

渾身の力を込めたジョルトブローが黄瀬の鳩尾へと突き刺さった・
・そして崩れ落ちた。

「またつまらぬものを殺めてしまった・・・

「んな」と言つとる場合か！モロ鳩尾いつたぞ！

「わああ！人がくの字に折れ曲がるの初めて見た！」

「シャレにならんつて！？

全員が混乱していた。が・・・

「な、殴るなんて酷いっスよ白崎つちへ・・・・・（泣）」

氣絶級の拳を入れられたにも関わらず、黄瀬はすぐに復活して白崎
に抗議した。

『（「キセキの世代」は耐久力も化け物かつ！？）』

みんなが「キセキの世代」（の打たれ強さ）に戦慄した。

「くそ——」こつを沈めれば屋上の公約を達成できたと言つた……！

(おまえなら耐えてくれると信じていたわ) 「

「本音と建て前が逆つスよー? そして相変わらず容赦ないつスね! .」

「

「完全な沈黙つてそういう意味ー? んな物騒なこと認められんわああああーーーーーーーーーーーーーー (怒) 」

そして白崎は逆Hビの刑を受けたのであった。

「さて、それでなにをじこひこひきた?..」

「いや、そんな股下から顔出した状態で普通にしゃべらないでほしいっス・・・」

逆Hビの刑で曲がった状態から戻っていなかつた。

「そんな事はどうでもいいこんで早く続けて下せ!。」

『(「そんな事つーへ.)』

「まあ、白崎つちなら不思議じゃないつスね。」

『(「不思議じやなこのつー? 白崎つて一体・・・.)』

帝光組の会話にみんな驚いていた。

「黄・後ろ・球」

「？」

バチイ！

「うー？」

黄瀬に向かってボールが飛んできた。

つた。ちよ・・・・・何!?

「せつかぐの再会中ワリーな。けどせつかく来てアイサツだけもねーだろ。ちょっと相手してくれよイケメン君」

ボールを投げたのは火神であつた。

火神！？」

火神君！」

「えへへそんな急に言わわれても…………あーでもキハIIせつき…………」

少し考えると、黄瀬は上着を脱ぎネクタイを外し始めた。

「よし、やうつか！いいもん見させてくれたお礼。」

•
•
•
•
•
•
!

「（見たのか……）」

「白崎つか、ちょい持つて。」

「仕方ない……そのかわり、おまえの全力を見せる。」

条件を付けて白崎は黄瀬から上着とネクタイを預かった。

「白崎つちに見られるのはマズイっスね……だからこそ燃えるつ
スけどね!!」

黄瀬は白崎の言葉でやる気満々になった。

「…………つもつー。」

「マズいかもしません。」

「え？」

「黄瀬の能力、それは……」

白崎は目を細め、火神と黄瀬を見つめた。

そして始まつた黄瀬と火神の1対1……

一キュッ キュッ ダムッ

「彼は見たプレイを一瞬で自分のものにする。」

「相変わらず、完璧だ。」

「…………なつ！？（しかもこれって…………模倣とかそ
んなレベルじゃない！完全に自分のものにしてるなんて！…）」

「（えけんな！…それさつきオレが…………なのに……
ウソだろ！？）」

「うおっ火神もスゲエ！…」

「反応した！？」

火神も負けじとくらい付いていくが、力負けして弾かれてしまった。

「がつ…………！？（オレよりキレでて…………しかもパ
ワーも！？）」

「これが…………」「キセキの世代」…………黒子、白崎、
オマエらの友達スゴすぎねえ！？」

「…………あんな人知りません」

「へ？」

「正直さつきまでボクも甘いことを考えてました。でも…………
数か月会っていないだけなのに…………彼は…………」

「これを予想できるのは…………私の知る限り一人しか思い浮かびま
せん。そのくらい…………」

予想を遥かに超える速さで「キセキの世代」の才能は進化してゐる。

「ん～・・・・・」「ねは・・・・・・わよつとな～～」

「？」

「」こんな拍子抜けじゃやまば・・・・・・挨拶だけじゃ帰れないス
わ。」

黄瀬は黒子と白崎の方へと視線を向ける。

「やつぱは黒子と白崎つべけだせこ。」

『・・・・・・・・・・?』

「海常おこでよ。また一緒にバスケやろい。」

『・・・・・・・なつひー?』

黄瀬の勧誘に黒子と白崎以外は田を見開いていた。

「マジな話、黒子つちのことは尊敬してゐるんスよ。こんなとこじや
宝の持ち腐れだって。白崎つちも「キセキの世代」と同等の実力が
あるじゃないつスか。つか、敵にしたくなないつス！－！こんな無名の
学校じやもつたいいないスよ！ね、ビツスか。」

「そんな風に語つてもうられるのは光榮です。」

「アリまで評価してくれるのがうれしく思ひ。」

「人のその気がありそうな発言に周囲は緊張するが……」

「丁重にお断りさせて頂きます。」

「一昨日来い。」

「文脈おかしくねえ！？」

黒子はぺこりと頭を下げて、白崎は一言で勧誘を断つた。

「そもそもしきくなつスよ！ 勝つことがすべてだつたじやん。なんでもつと強いトコ行かないの？」

「あの時から考えが変わつたんです。なにより火神君と約束しました。キミ達を……、「キセキの世代」を倒すと。」

「何度もだこれ言つの……私は「完全勝利」を目指している。強い相手に勝つてこそ、それは証明される……おまえら「キセキの世代」をな。」

「…………やつぱらしくねースよ。そんな冗談言つなんて」

「…………ハハッ（これが「キセキの世代」…………スゲーわマジ…………）」

「不気味な笑いが多いぞ。」

「ほつとけーつたくなんだよ…………オレのセリフどんな黒子（二ヤケチまづ…………しかももつと強えーのがまだ4人もいるのかよー？）」

「冗談苦手なのは変わつてません。本気です」

一人の様子を見て、白崎は小さく笑みを漏らした。

「オマケ~

「そーいえば白崎つちー...ジーして行く学校教えてくれなかつたんス
か!?」

「おまえに教えて『同じとこに行くつス!..』なんていわれると迷
惑だからだ。」

「ひどい!..?」

「NGシーン~

「白崎つち、ちょい持つてて。」

「わかった・・・・・・・・・・・・黄瀬涼太の上半身制服+ネクタイ、
一万円からスタートです。」

「二万!..」「三万!..」「三万五千!..」

いきなり周りにいた黄瀬のファン相手にオーケーションを始めた。

「やめてええええ――――――！」

「なぜだ？新しい制服買えば得するだろう」「五万！――」ほら、よかつたな。」

「そういう問題じゃないつス！！」

「「キセキの世代」の一人、黄瀬涼太」（後書き）

次回、海常戦スタートです。

「最高の前提があるからJAN、最上の結果が得られる」（前書き）

今日は短めです。海常戦スタート

「最高の前提があるから」JR、「最上の結果が得られる」

今日はいよいよ海常高校との練習試合……誠凜メンバーは海常へと足を踏み入れていた。

「おお～～広れ～～～。やっぱ運動部に力入れてるトコは違うねー。」

校内を見回すメンバーの中に田の下に隠を作り、更に充血までしてる者が一人いた。

「火神君、いつも増して悪いです田つき・・・・・・・・

「るせー。ちよつとテンション上がりすぎて寝れなかつただけだ。」

「・・・・・遠足前の小学生ですか。」

「コンディショング管理もスボーツ選手の務めだろ?」「・・・倒れるよつな真似はするなよ。」

あきれた様子の一人、そこへ・・・

「じもつス、今日は畠さんよろしくつス。」

「黄瀬・・・・・・・・」

「広いんでお迎えにあがりました。」

校内に入つすぐ、黄瀬が誠凜メンバーを出迎えにやつてきた。

「黒子つち～～あんなアツサリフルから・・・・・・毎晩枕を濡らしてんスよも～～・・・・・」

「さあ、と涙を流しながら黄瀬は黒子に近づいた。

「女の子にもフラされたことないんスよ～～」

「…………サリッシュイイヤ!!」壁のやめてもうれますか。ボクよ
り白崎君はこいんですか?」

「ううう～～・・・白崎つちも遠慮も容赦もなしに一刀両断するん
スもん・・・いくらオレだつて傷つくんスよ～～・・・」

「押しつけんな黒子・・・・・・おまえも今更そんなこと泣くん
じゃない。」

白崎にへばりついてオイオイと泣く黄瀬、白崎は迷惑そうに手を離す。

「だから黒子っちはあそこまで言わせて、白崎っちが興味を持つて
いるキミには・・・・・ちょっと興味あるんス。『キセキの世代』
なんて呼び名に別にこだわりとかはないスけど・・・・・あんだ
けハツキリケン力売られちゃあね・・・・・」

すつと目を細め、黄瀬は火神を見つめた。

「オレもそこまで人間できてないんで・・・・・・悪いけど本気でツブすつスよ。」

「つたりめーだ！」

そんな一人のやり取りを黒子と白崎は黙つて見ていた。

「あと、オレらが勝つたら白崎つちはウチがいただくんで。」

『はあー!?』

「なぜ私だけだ、黒子はいるのか?」

「巻き込まないでください。」

黄瀬の爆弾発言に白崎は黒子も道連れにじょりとするも黒子は即否定した。

「黒子つちよりは可能性高そうスからー。」

「なんだそれは・・・・・ハア・・・・勝てるのなら好きにするがいい・・・・・・」

「やっぱダメっス・・・・え?い、いいんですかー!?」

驚きのあまり語尾が普通のものに変わる黄瀬。

「好きにひーり・・・面倒だ。」

『（それでいいのか白崎ーーーーーーーー?）』

「あ、いいです。」

「…………って、え？」

体育館に到着し館内を見ると、信じられない光景が広がっていた。

「…………片面…………でやるの？」

「ホールの半分はネットで区切られていた。

「もう片面は練習中…………？」

「てか片側のホールは年季入ってんな…………」

誠凛メンバーが自分の目を疑っていると、太った中年の男が近づいてきた、たぶん監督だろう。

「ああ、来たか。今日はいつだけでもうりえるかな？」

「ひからじやようしきお願いします…………で、あの…………・これな…………？」

「見たままだよ。今日の試合、ウチは軽い調整のつもりだが…………出ない部員に見学させることは学ぶものがなさすぎてね。無駄をなくすため他の部員達には普段通り練習してもらってるよ。だが調整とは言つてもウチのレギュラーのだ。トリプルスコアなどにならないように頼むよ。」

あまりに見下した態度に全員が不満な表情…………中でも監督と火神と白崎はヤバかった。

「（ナメやがって…………つまりは「練習の片手間に相手して

やね」「うーんとかよ…………」

「大変ありがたい配慮あつがとつぱれこます。黄瀬、後でこいつに
きなぞこ・・・（笑）」

「（顔が笑つてないつスよー?）」

ただでさえ怖い顔の白崎が能面のような顔で怒氣を発しているの
ビビる黄瀬。

「…………ん?何、ゴーフォーム着とるんだ?、黄瀬、オマエ
はせ田さんぞー!」

「え?」

「各中隊のHース級がじろじろこる海常の中でもオマエは格が違う
んだ。」

「ちよつ、カントクやめて。モーゆー方にマジやめて。」

「黄瀬抜きのレギュラー相手も務まらんかもしれんの……
出したら試合にもならなくなつてしまつよ。」

海常の監督の最後の言葉を聞いて、全員不満が爆発寸前になつてい
た。その中でも白崎は特にヤバかった。

「……………（笑）」

『（レギュラー）』

赤い目を光らせ、黒いオーラが立ち上がるその姿は夜叉にしか見えなかつた。

「すいません、マジすいません。大丈夫、ベンチにはオレ入ってるから！あの人、ギャフンと言わせてくれればたぶんオレ出してもらえるし！オレがワガママ言つてもいいスけど・・・・・オレを引きずり出すこともできないようじや・・・・・・・・「キセキの世代」倒すとか言つ資格もないしね。」

「おまえ…………よく『ハ』相手に挑発できるな…………」

火神がもはや人ではないなにかに変身しそうな白崎を指さしていつた。

「後悔してゐるつス！！（汗）」

「オイ、誠凜のみなさんを更衣室へ」案内しろー。」

「アップはしといて下さい。出番待つとかないんで。」

「あの・・・・・・スイマセン。調整とかそーゆーのはちょっとムリかと・・・・・・」

「『やんな三四一』すぐなくなつてゐるこゝか。」

「なんだと？」

「白崎つち・・・？」

黄瀬は更衣室へ向かおうとする白崎をおそるおそる呼び止めた。

「ん？」

振り返った白崎は元に戻っていた。それをみた黄瀬は安堵した。

「よかつたっス……あんだけ怒ったの久しぶりに見るっスから…」

「あれだけ見下されればな……相手に対する礼を欠くなどあり得てはならないというのに……」

「相変わらずっスね、そのスポーツマン精神は（笑）」

「当たり前のこと。『最高の前提があるからこそ、最上の結果が得られる』そういうべきだ。ゆえに、怒りなどという、判断を鈍らせるだけのものを試合に持ち込むのは愚の骨頂。」

「おーーい！…白崎…早く着替える…！」

田向の叫びが聞こえてあわてて更衣室に向かった。

「それではこれから誠凛高校対海常高校の練習試合を始めます。」

試合に出る者はコートの真ん中に集まり一列に並ぶ。

「…………や、あの…………だから始めるんで………
誠凛、早く5人整列して下さい。」

誠凛側には3人しかいなかつた。

「つて……あんたも行くのよ……」

監督が白崎に向かつて言つた。

「はい? いや、しかし……」

「しかしじゃなーーー! あんたもスターター、とつとと行くーーー!」

監督に怒られてしぶしぶ白崎が並ぶ。

「いや、だから・・・あと1人・・・」

「あの・・・・・・います5人。」

『・・・・・おおえ! ! ?』

黒子の存在に気づき海常のメンバーは驚きの声を上げた。

「つめつめ! なんだアイツ! ! ?

「薄っすいな〜〜カゲ・・・・・・」

「あんなんがスタメン・・・・・! ?

隣で練習していた部員も黒子のカゲの薄さに驚いていた。

「(うわ、目の前にいて気づかなかつたし・・・・・・あの白髪

は乗り気じゃなさそうだし……）」

「（シロボ……………）」りやー〇番だけだな要注意は

「（てかバスケできんの！？）」

「話にならんな・・・・・・大口たたくからもう少しまともな選手
が出てくると思ったが。」

「…………どうですかね。まあ確かに…………まともじやないかもしないスね…………でも…………」

黒子を知る黄瀬だけは笑みを浮かべてそう言ったが、白崎を見て顔を曇らす。

「まともな試合にはならないかもしけないつスね・・・・・」

残念そうな顔で言った。

- ० ० ० ० ०

「どしたんスかカントク・・・・・?」

カントクは海常のメンバーを見て表情を引きつらせた。

・・・・正直、さすが全国クラスつてカンジね・・・・・）」

そして試合は始まり、ボールは海常チームの手に渡った。

「ハーハーんじゅめす一本一キツチリいくぞー。」

次の瞬間、黒子が4番の持っていたボールを弾きボールを奪い取った。

ボールを持つた黒子を4番がすぐに追いかける。

「（…………うと困つたりなんだ………）ライシ遅せえ！
一）」

前に回りマークしたが、黒子はすぐに持っていたボールを隣にいた火神へとパスした。

「あ！？」

『アーティスト』

バキヤ！

火神は飛び上がり、一発目からダンクを決めた・・・・・・だが、妙な音も聞こえた。

「お？」

火神の手には壊れたゴールのリング・・・・・

「おお？」

『おおおええ～～！？』「一ルぶつ」わしゃがつたあーーー？』

「あつぶね、ボルト一本サビてるよ・・・・・・」

「それでもフツーねえよーー！」

流石にこの光景に誰もが驚いた。

相手の監督の方は声も出ない様子で驚いていた。

お二、リンクで思つたよか元ケーな。」
「ある黒子トム。

「……するつて……まずは謝つてそれから……すみません、ゴール壊れてしまつたんでもう片方のゴール使わせてもらえませんか。」

「よその設備を壊すな・・・」

試合は派手な出だしで始まった。

（NGシーン）

「どーするって・・・・・まずは謝つてそれから・・・・・す
みません、ゴール壊れてしまつたんでもう片方のポート使わせても
らえませんか。」

「どうせならやつちの仕返しに反対側のゴールも破壊するか・・・
火神、やれ。」

「オレかよつー!?」

「最高の前提があるからJAP、最上の結果が得られる」（後書き）

ZGシーンあんまりおもしろくないかな？次回、黄瀬参戦！

「勝てねエぐら」がちょうどここに」（前書き）

一人の弱点発覚です。

「勝てねェぐらゝがちょうどいい」

火神がゴールを破壊したため、コートを全面使う事になった。

「何？ 結局全面使うの？」

「ゴールぶつ壊した奴がいんだってよ！」

「はあ？ ・・・・・うおー・マジだよーー！」

一時試合を中断し、コートの整備が行われた。

「確かにありやギャフンっスわ。監督のあんな顔初めて見たし。」

「人ナメた態度ばつかとつてっからだつとけ！」

「火神君・・・・・・ゴールつて・・・・・・いくらするんですか
ね？」

「え！？ あれって弁償！？」

「とんでもない」としたな・・・新品で7桁いくぞ。」

白崎の言葉に火神は絶句した。

「マジ！？」

「まあ、リングだけ交換できるなら高くはないし、今回は整備不良のものを使わせたあちらの責任だろ？。」

その言葉を聞いて火神は安心した。

「驚かせんな！…つて、なんでそんなコト知つてんだよ？」

「中学時代に頻繁にどこかのバカが破壊して、監督に泣きつかれたからだ・・・」

火神の疑問に黄瀬をにらみながら答えた。黄瀬は目をそらした。

「黄瀬！…ちょっと来い！！」

「呼ばれてるから行くつス！…またアトで…！」

これ幸いと走つていく黄瀬に向けられる視線は冷たかった。

ピーッ

「それでは試合再開します。」

ゴート整備が終わり、ようやく試合再開となつた。

「やつと出やがったな・・・・・・」

「スイツチ入るとモデルとは思えねー迫力だすなオイ。」

「・・・・・伊達じゃないですよ、中身も。」

「（改めて観ると・・・・・バケモノだわ・・・・・黄瀬涼太・

・・・・・！）」

黄瀬の数値を見たカントクは田を見開き驚くしかなかった。

「キャアア黄瀬クーンー！」

「コードには黄瀬ファンと思われる女子の黄色い声が飛び交っていた。

「うおわー!? なんじやー?」

「あーあれ? アイツが出るといつもっすよ。」

「・・・てゆーか、テメーもいつまでも手とか振ってんじゃねーよ
!...!」

「いひつ、スマッシュヤーーンッ。」

いつまでも手を振る黄瀬にイラついた海常の主将、笠松幸男は思いつきり足蹴りした。

「シバくぞーー!」

「もうシバいてます・・・・・・」

「てゆーか今の状況分かつてんのか黄瀬ーーーあんだけ盛大なアイ
サツもらつたんだぞウチはーー」

「いひつ、いひて。」

足蹴りから追い討ちをかけるように笠松は黄瀬に肩パンを何度も繰り返す。

「キッチリお返ししなきゃ失礼だろが！」

そして試合は始まり、ボールは黄瀬の手に渡る。

「いつもアイサツさせてもらうスよ。」

………！（ハイジまさか！？）

ガシャ!

先程の火神と全く同じフレイで黄瀨はタンケを決めた。

ハガヤ口にふる壊せ!! たゞか!! まだくついてんよ!!

卷之三

(レ) ナラタジ

どうやら「ホールを壊してほしかつたらしく、笠松は黄瀬に再び足蹴りした。

「試合がでなくなってしまう…………」

— そんとおは「イツ」に謝罪をせらつもりだつたからな、蹴つてから

L

「どうせここにしろ蹴られるんスね！？」

「（いや、威力はオレより…………）」

ギシギシと揺れる「ホールを見れば、火神より黄瀬の力が上だとわかつた。

「女の子にはあんまつスけど…………バスケでお返し忘れたことはないんスわ。」

「上等だ！――黒子オヨヒセ――！」

黒子はボールを火神へとバスを回す。

「んおつゝ、やべつ」

「~~~~~！？（やつきから出てくんだコマイシは――！？）

「

『おお――』

「（おも全開でいくぞ――！）

これを引き金に、点の取り合いで始まった。

「（おも、なによ）・・・・・・・・」

「なんなんだ一体――このハイペースは――？」

「まだ始まって3分だぞ――？」

試合は異常な程にハイペースだった。

「（こ）んなの・・・・・・ノーガードで殴り合つてるようなもんじ
やない・・・・・・！DFは当然全力でやつてる・・・・・・ただ
それよりお互いの矛が強すぎる・・・・・・！それに・・・）」

「くつー！」

「なにやつてんだ白崎――――――！」

持つていたボールを弾かれ、奪われる。

「（予想外なのは白崎君・・・・・・スペック上は黄瀬君と火神君
に次いで高いのに、動きは平凡以下・・・あの先読みの指示もない、
どうして！？）」

ダムツ

「後ろにフェイダウェイー？」

火神はショートを放つが、それを黄瀬に阻止された。

「なつ・・・・・・！？」

キュッキュッダムツ・・・・・・

「（フェイダウェイ・・・・・・やはり返してきますか）」

火神がムキになつて挑めば挑む程、黄瀬はそれ以上の力で返していく。
る。

このままではついていくので精一杯……ジリ貧になるだけ。

「誠凜T・Oです。」

いいタイミングでT・Oが入った。

誠凜のメンバーはかなり体力を消耗し疲弊していた。

「（みんなまだ5分とは思えないほど疲れてる・・・・・・ムリもないわ、攻守が替わるスピードが尋常じやない！）

「とにかくまずは黄瀬君ね。」

「火神でも抑えられないなんて・・・・・・」

「もう一人つけるか？」

「なつ・・・・・・ちょっと待つてくれ・・・・・・ださい！――

「ださい・・・・・・？」

敬語が苦手らしい火神はおかしな日本語になっていた。

「・・・・・・いや、活路はあります。」

「封じる手は・・・・ある。」

黒子と白崎の言葉を聞いて全員の視線が集まる。

「「彼には弱点がある」」

手の内を知り尽くす一人の言葉が重なった・・・・・

「弱点・・・・・・・・・・・・?」

弱点があるといつ言葉に全員が一人に釘づけとなつた。

「なんだよ、そんなのあんなら卑く・・・・・・・

「いや・・・・・・・正直、弱点と言えるほどじゃないんですけど・・・・・

「それよつもすこません、もう一つ問題が・・・・・・

「すみません、私も言つておぐべきでした。」

「え?」

「予想外のハイペースでもう効力を失い始めてるんです。」

「もう少し時間をもらえなければ動けません。」

「・・・・・・・!?

一方海常でも黒子と白崎の弱点が語られていた。

「彼のミステイクションは40分フルには発動できないんス。」

「ミスティ・・・・・・何!?」

「11番のカゲの薄さは別に魔法とか使つてゐわけじゃなくて・・・
・・・ザックリ言えば他に気をそらしてゐるだけ。一瞬ならオレでも
できます。オレを見てください。」

黄瀬が片手に持ったボールを上へと放り投げると、笠松の視線はボールへと移る。

「ホラ、もう見てない!」

「あ！」

「黒子つちは並外れた観察眼でこれと同じことを連續で行つて消え
たと錯覚するほど自分をウスめてバスの中継役になる。まあ、やん
なくとも元からカゲはウスいんスけど・・・・・けど、使いすぎ
れば慣れられて効果はどんどん薄まつていくんス。」

「なるほどな・・・・・・」

「それにこれから気をつけるのは白崎っちの方っス。」

「白崎つて・・・・・あの15番か? そんな警戒するほどじやないだろ。」

笠松は白崎を思い出す。容姿には驚いたがプレイは平凡以下・・・危機感を持つには実力不足だと思った。

「それはつスね・・・」

黄瀬は海常メンバーに白崎の能力を説明する。するとじんじん険しい顔に変わっていく。

「とんでもねーなオイ……だけどなんでそれを使わなかつたんだ？」

「白崎つちは先読みつていうほど余裕を持つて事前にわかるんじゃないんスよ。常人離れした目と動体視力と反射神経で、筋肉の動きや力の向き・強さを『見て、一瞬で判断・計算して行動できる』らしい。簡単に言つと見た情報を使って一瞬でどうなるかを判断できるつてことつス。」

「だが、その情報を集めるために時間がかかるつてトコが？」

笠松は予想した弱点を黄瀬に確認する。それにつなぎいて

「相手の5人全員の筋肉の動きやクセを覚えるなんてできたとしてもスゴイ集中がいるつス。それこそほかのことに対する意識を向ける余裕がないくらいに。だから覚えるまでの白崎つちはほとんど集中できていない足手まといと同じなんス。」

そして誠凜でも二人の弱点は語られ、それを聞いたカントクに一人はシメられていた。

「そーゆー大事なことは最初に言わんか——！」

「すいません、聞かれなかつたんで………」

「監督命令で出でと言われたので……」

「聞かな何もしゃべらんのかおのれらは……」

二人からメキメキとイヤな音ができる。

「（でも私もウカツだつた――！）こんな反則技がノーリスクでやれるつて方が甘いわ…………」

「T・O終了です！！」

更に追い討ちをかけるかのよつT・Oの時間が終了。

「あ――！黒子君と田崎君シバいて終わつちやつた――――！」

「（）のままマーク続けさせてくれ…………ださい。もひょこで何か掴めそんなんス。」

「あつちよ待つ…………火神君！」

カントクの話を最後まで聞かず、火神は先にコートの中へと戻つていぐ。

「もう――・・・・・とにかくDFマンツーからゾーンに変更！中固めて黄瀬君来たらヘルプ早めに！黄瀬阻止最優先――！」

『おつー』

「あと黒子君はちよつとペースダウン。思いきり点差引き離されな

い程度に。できるべく

「やつてみます。」

「白崎君はプレイに集中して、覚えるのに使う時間は最小限で、できるべく

「難しいかもしません・・・無意識レベルで覚える」と集中してしまいそうですから・・・」

「ああ、もう一・じゅあベンチから覚える」とは?「

「できます。田の前で見られたのでそんなにかからないかと。」

「わかった。メンバー交代お願いします!水戸君、行って!」

「・・・・・・・・(レバウ)」

それを聞いて白崎は水戸君と交代した。

キコッキキコッ

「(あーもーいきなりズッコけたわーーーーー。まだ第1クオーター途中で2回のトーオの使つなんてバカすぎてできないし・・・・・・)」

カントクは田に涙を浮かべながらガックリと肩を落としていた。

「お?」

キュウ・・・・・

「あ、中固めてきた・・・・・！」

「（ひかほぼボックスワンだな。10番をみんなでフォローしてとにかく黄瀬を止めようってカンジか）・・・・・やんなるぜまつたぐ。」

ヒコツ

パツツ

笠松はそこから飛び上がり、3Pを決めた。

「おお、一蹴の3P！？」

『いいぞいいぞ笠松！…いいぞいいぞ笠松！…』

「海常レギュラーナメてんのか？ヌリにも程があるぜ。」

『ディーフェンス－ディーフェンス！』

「くつ・・・・・・」

キキュツ

バシッ！

火神は黄瀬に抑えられ、黒子はミスティレクションの効力が弱まっているせいで相手にボールを弾かれる・・・・・流れは明らかに

海常だった。

「なるほど…………少しすつ慣れてきたかも…………」

「へそ…………」

「ジワジワ…………差がひらく…………」

「20・35…………（流石にキツイ…………）」

バシッ！

「ぐつ…………」

「アウト・オブ・バウンズ！－白ボール！－」

「…………そろそろ認めたらどうですか？今のキミ、やっぱ『キセキの世代』に挑むとか10年早えつスわ。」

「なんだと…………？」

「田崎つちが出なきやこの試合、もつ差が開くことはあっても縮まることはなこっスよ。」

「…………」

「チームとしての陣型や戦略以前に、まずバスケは「体格のスポーツ」。誠凛と海常じや5人の基本性能が違いすぎる。唯一対抗できる可能性があったのはキミっスけど、だいたい実力は分かつたつス。潜在能力は認める。けどオレには及ばない。キミがどんな技をやる

うと見ればオレはすぐ倍返しできる。どう足搔いてもオレには勝てねえスよ。白崎っちにしてもオレが相手じや見極めるのに時間がかかる。その前に追いつくための時間が足りなくなる。ま・・・・・現実は甘くないってことスよ。」

まさに八方ふさがりの状況。
だが・・・

ケッケッケ・・・・・ハツハ・・・・・ハハハハハ・・・・・

突然笑し始めた火神に全員が口を丸くした。

「ワリー、ワリー、ちよつと嬉しくてさア……そーゆー」と
言つてくれる奴久しづりだつたから。」

• • • • • ! ?

「アメリカじゃそれがフツーだつたんだけどな。」

「え！？ アメリカいたの！？ すげえつ。

「日本帰つてバスケから離れたのは早トチリだつたわ。ハリ出るぜ
マジで。やっぱ人生挑戦してナンボじやん。強ええ奴がいねーと生
きがいになんねーだろが。勝てねエぐらいがちょうどいい。」

「それじゃ負けるのではないか？」

「まだまだ！これからだろ！聞いてねえゴタク並べんのは早えーん

じゃねーの？…………おかげでわかつたぜオマエの弱点。」

「…？」

「自分から言い出しづらかったのもちょっとわかるわ。」

火神はキヨロキヨロと周囲を見始めた。

「火神、右斜め後ろ。」

「サンキュー、見ればできる？見えなかつたら？そもそも元からウスいのが前提じや、やれつて方がムリな話だろ。」

白崎に言われた方を見て、目的の人物である黒子を見つけるなり火神は黒子の首根っこを引っ掴んだ。

「いくら身体能力が優れてるオマエでも、カゲを極限までウスめるバスケスタイルだけはできない。…………つまり、コイツだろ！オマエの弱点！」

「何すんですか。」

「ようやく見えた突破口…………ここから誠凛の逆襲は始まる。」

（NGシーン）

「自分から言に出しちゃひかってのもひとつわかるわ。」

火神はキヨ 口キヨ 口と周囲を見始めた。

「火神、左斜め後ろ。」

「サンキュー、見ればできる？見えなかつたら？そもそも元からウ
スいのが前提じや、やれつて方がムリな話だろ。」

白崎に言われた方に手を向けて、火神はそこにいた人の首根っこを
引っ掴んだ。

「いくら身体能力が優れてるオマエでも、カゲを極限までウスめる
バスケスタイルだけはできない。・・・・・つまり、コイツだろ

「・・・・・だれつスか?」

二
？」

黄瀬の言葉で、火神は初めてその人を見る。

「だれがカゲ薄いじや コラアアアア————（怒）」

「へふつつ！？」

掘んでいた人物・・・日向に思い切り殴られた。

「あれ？違つたか？」

「おやじさん、二階ね。」

「勝てねエぐらーがちょいとこー」（後書き）

白崎がカツコ悪い・・・期待してくれた方すみません。もう少しあとで活躍します。

次回、誠稟反撃開始。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909z/>

黒子のバスケ～全てを見通す氷の目～

2011年12月28日21時53分発行